

▼
四国

“竹明かりの宵”を取材

上村 基(RKC)

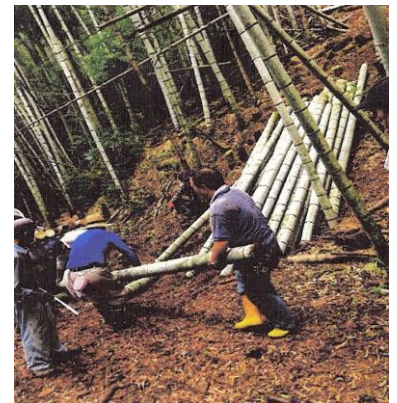
横長な高知県のと真ん中、太平洋に面した安芸郡芸西村(げいせいむら)で、昨年の12月1日から年明けの1月10日まで“竹明かりの宵”と称するイベントが開催された。今回の会場は、村内の「ロイヤルホテル土佐」前庭に広がる池の辺り。

初日の夕方5時、立ち並んだ150本の竹のオブジェに灯りが

灯される。多様な変化に富んだ竹灯り、アーチ型もあれば、バスケット様の灯りも……。

月明かりの中で、灯りが池の水面に映えて、まさに幻想の世界だ。村内外からの観客も「ホントにきれい、心まで洗われた気分です」など歓声を上げていた。

灯火となる竹、一本一本の図柄や組み合わせ、配置などは熊本の業者に委託した。竹の手配、準備には多数の村民がボランティアで参加、役場のスタッフと協力して100日あまりかけて製作



孟宗竹の伐採

するという大労作となった。

芸西村では昔から竹にかかわる仕事が多数あり、例えば村の主要産業になっている園芸ハウスの骨組みは、ほとんど竹材が使われていたり、その他、籠作りや竹ヒゴを使った饅頭笠づくりなどは、今でも残っているという。

ところが近年になって、主力のビニールハウスの骨組みが鉄骨に変わり、竹材の利用が減ると、こんどは竹が余る“竹害問題”が出てきた。

利用されなくなった竹林は、竹が生茂り、光が届かなくなる。林内の植物は枯れ、生態系は崩れ、周囲の林業や農業の妨げにまでなったのだ。これではいかんと2014



穴あけ作業

年「地域づくりワークショップ」で「竹資源活用企画」が持ち上がり、翌2015年にこの「竹明かりの宵」イベントがスタートすることになる。

当時の会場は、村の海岸沿いに立つ松林「琴ヶ浜」。10月の第一土曜日、一日限りで実施した。準備も9月に3日間で仕上げの手軽さだった。それでも夜は三千人あまりを集める人気で、これを4年間続ける盛況ぶり。しかし、好事魔多し、コロナで一昨年と昨年の2年間で中断せざるを得なかった。

満を持して開催した今年の「竹明かり」。規模、日程とも拡大したことで、村民の期待通り観客7,500人あまりを動員して終了できたようだ。